

## 自然観察会報告

# 清水三保海岸ビーチコーミングと東海大学自然史博物館の見学会

佐々木彰央



柴学芸員の説明を聞く参加者



ビーチコーミングを行う



東海大学自然史博物館



館内を見学する

1月26日、朝から快晴に恵まれ、穏やかな気候の中で三保の海岸に打ち上げられた漂着物の観察会を実施しました。

観察会には資料センターで貝類の標本整理を担当されている高山壽彦氏、東海大学で駿河湾の深海性魚類を主に調査研究されている水産学博士高見宗広氏、東海大学自然史博物館で学芸員をされている柴正博氏の三人から三保の漂着物の種類と三保海岸の形成について説明をしていただきました。

参加者はトンブや手袋を手に持ち、三保の砂利浜をゆっくりと歩き回り、巻貝や二枚貝、カニの脱皮殻、大型の硬骨魚類の肋骨などを拾い上げ、その種類や性質について専門家から説明を受けていました。

その結果、貝類はキサゴ、イボニシ、ヒラカメガイなど約68種をみつけることができました。また、ジャンボタニシやヒメタニシ、

マイマイの仲間やキセルガイなど、陸や淡水で生きる貝類もみつけられました。おそらく、河川から流されて海を漂っていたものと考えられます。

続いて、東海大学自然史博物館の見学会を行いました。館内の展示物の説明は柴正博氏からしていただきました。館内には軟体動物・節足動物・魚類の化石が展示されており、参加者達は太古の海の様子に思いを馳せながら、熱心に標本を観察している様子でした。

また、今回は特別展として当NPO法人が作成した外来生物の展示パネルと標本が博物館内の一角に展示されており、参加者の方々にも見ていただきました。

三保の松原が世界文化遺産に登録され文化的側面だけが注目されていますが、今回の観察会と見学会を通して、三保半島の自然についても知っていただけたと思います。